神静文芸

劇場留学～『モモ』と音楽の旅～

小田原三の丸ホール職員　森田　百合花

間もなく「劇場留学～『モモ』と音楽の旅～」の幕が上がります。「劇場留学」は、小田原三の丸ホールがプロのアーティストと市民と一緒に劇場作品を創作し上演する事業として２０２３年より実施してきました。第二弾の「『モモ』と時間の旅」の上演から、大胆なリクリエイションで再びミヒャエル・エンデの『モモ』を上演します。単なる再演ではありません。台本も書き換え、美術や演出、出演者も違い、同じエンデの『モモ』でも一味も二味も異なる魅力のある『モモ』となります。

小説『モモ』は、今でも世界中で読まれている児童文学です。私は大人になってからはじめて読みましたが、正直、とても怖くてつらかったです。今を生きる私たちが抱える問題を50年も前に小説として書いたエンデはまるで預言者のようです。

「子どもも大人も観て楽しめる作品」を目指す劇場留学の企画には重すぎるのではないか、当初は心配もありました。でも作品でも語られているように、劇場で繰り広げられるお芝居は、現実のようにも感じられながら、豊かなフィクションなのです（しかも『モモ』はファンタジー作品！）。

劇場留学に集まった人たちは、「お芝居をしてみたい」「音楽が好き」「楽しそうだから」「お芝居をするのがお仕事」といった一人ひとりの想いがあります。この人たちと一緒に今ここでしか生まれない『モモ』のお芝居をつくることができ、嬉しく思います。そして劇場で観客の皆さんと共に、何を感じ、何を考えるのか楽しみにしています。ぜひ、皆さんの目の前で起きることを一緒に楽しんでください。

灰色の男たちの会議シーンの稽古の様子

「『モモ』と時間の旅」カーテンコールの様子（２０２５年３月）

もりた・ゆりか
２０２１年より同ホール勤務。文化事業の制作担当として劇場留学の企画立案に携わる。

■公演情報「劇場留学～『モモ』と音楽の旅～モモ」

【日時】
３月27日（金）午後７時開演
28日（土）午後２時開演／午後６時開演
29日（日）午後２時開演
※各回30分前開場

【会場】
小田原三の丸ホール（本町１－７－50）
小ホール

【料金】全席自由
一般３０００円
中学生～18歳以下２５００円
小学生以下５００円

【脚本・演出・美術】川口智子
【振付】木原浩太
【音楽】鈴木光介
【原作】
ミヒャエル・エンデ作／大島かおり訳　岩波書店刊『モモ』
copyright (c)Michael Ende Estate (www.michaelende.de), represented by AVA international GmbH, Germany (www.ava-international.de)
【出演】
尾倉ケント、栗原沙也加、木原浩太、高橋　牧、公募出演者22名

今、体験する『モモ』の物語

演出家　川口智子

のんびりとした温かい町のお喋りな床屋さんにも、雨が降るひとりぼっちのちょっと憂鬱な日があって、そんな時に灰色の紳士たちは時間を盗みにやってきます。時間貯蓄銀行からやってきたというその紳士は、なぜか床屋さんの生活のことをよく知っている。年をとって耳の聞こえないお母さんと毎日1時間お喋りすることも、セキセイインコを飼っていることも、毎週1回合唱団の練習に出たり、週2回行きつけの飲み屋に行くことも、床屋さんが秘密にしている大事な時間の使い方も全部知っている。SNSなんてものがない時代にエンデはこのお話を書いていますが、今だとすればより想像がつきます。灰色の紳士は人が何に時間を使っているかをよく知っていて、その人が秘密にしている時間までも盗むために、時間の倹約を持ちかける。「時は金なり――節約せよ！」。

床屋さんはお喋りをやめて仕事をさっさと片付けて、人付き合いも悪くなって、そうしているうちに怒りっぽくて憂鬱そうな人間になってしまう。床屋さんだけじゃなくて、他の大人たちも伝染性の病にかかったかのように同じようにイライラして鬱々として、子どもたちと過ごす時間も倹約して、今では子どもたちは与えられたお小遣いでつまらなそうに遊んでいる。

「時間泥棒」と言うと、効率に反する無駄な時間を指すように思いますが、灰色の紳士はむしろ効率化することで節約した時間を盗んでいく。インターネットで検索をかければ自動的に回答をくれるAIは、まさに私たちの情報と引き換えに時間を節約してくれているのですが、そのために（大きな電力も使われて）地球が破壊されているということにも、エンデは予言的に警鐘を鳴らしていました。

エンデの著作を読んでいると（親しみを込めて、本当はエンデさん、と言いたいのですが）、劇場がたくさん出てきます。『モモ』ではモモが住む廃墟の劇場が舞台になっているし、モモや子どもたちが「物語りをする最後の人間になるだろう」と書かれています。劇場、物語りという行為が、時間を節約するのにはもっとも難しいことのひとつかもしれません。

本や映画の物語。あらすじを読んで本一冊を読んだことにしたり、パソコンの画面で映画を2倍速にして見たりなんていうことがあるかもしれません。でも、本当に好きな本や映画は何回も見たくまでの道中を楽しんだり、きっと人それぞれのこだわりの楽しみ方があるはずです。

演劇／劇場はつくるのにも見るのにも時間の節約には向かない体験です。むしろ、面倒臭さに真正面から向き合わないといけない体験とも言えます。演劇では、他人の言葉をすっかり覚えて、それを初めて口にするように発話します。現実では、自分の前にいる誰かに向かって話したり、今自分がおかれている状況で何かを判断しながら喋るけれども、演劇の場合は、誰に向かって喋るのかも、今どういうことが起こっているのかも、現実よりも限られている情報をより繊細な次元で読み取って、そこから自分のお芝居をつくっていかなきゃいけない。お客さんも同じで、なんにもない空間で「廃墟の劇場」と言われたとして、VRゴーグルをかけていれば作られた映像が自分の周りに現れるかもしれなくても、演劇ではそうはいかない。

けれども、実際には三の丸ホールにいるのに、なんだかいつもと体の感覚が変わって、いつもより人間がよく（精細に）見えるようなことが劇場では起こります。そんな風に人間のことを見る時間は、時間を節約していたら起こりません。だって、ただ、人間を見ているだけかもしれないのだから。

そんな時に、もしかしたら、雨の鬱々としたある1日の床屋さんのことがグッとわかるかもしれない。時間貯蓄銀行から来た灰色の紳士の言葉がとっても魅力的に聞こえる瞬間があるかもしれない。

現実とは違って、お芝居（物語）には終わりがあります。だからこそ、日々の生活の中では立ち止まることのできない大きな時間の中で、人間を見てもらいたいと思います。

「劇場留学」には小田原に縁のある方々が集まっています。舞台上で『モモ』を物語っていた人たち、劇場で『モモ』の物語を聞いてくれた人たちが、小田原の町で生活していく。物語／お芝居は終わっても、その体験や記憶が町のどこかにきっと残ります。雨の日に町を歩きながら、ふと床屋のフージーさんを思い出すようなことも、節約しきれない人間の時間かもしれません。

かわぐち・ともこ
代表作にコンテンポラリー・パンク・オペラ『鏡の向こう見えない私の顔』。